

北海道大学 YMCA

# 汝羊寮

2013 年度学 Y 活動報告書

## 2013年度 活動報告

### 1. 全国

#### ■東北被災地支援ボランティア（2013/5/2～5）

---

活動場所：宮城県仙台市若林区笹屋敷

参加者：寮生4名，札幌YWCA（北大生）1名

#### 【行程】

3日 スローワーク：畑のゴミ拾い，お祭り準備

4日 すずめ踊りのお祭り：運営・お手伝い

※また、4/19,26 および 5/10 に寮内にて事前学習、報告会をおこなった。

#### 【寮生感想】

##### 開く ～ 東北支援活動から ～

農学部3年(当時2年) 菅井徹人

前期学Y代表であった私は、方針を討議する場において1つの指針を提案した。それは2013年度前期に汝羊寮が取り組む学Y活動を「開いた」ものにしようということである。「開いた」という言葉の具体的な意味合いは、対外活動を増やして自分たちの活動範囲を広げ、相互に影響されるような活動を目指していくといった方針を指す。ここで紹介する「東北被災地支援ボランティア」という企画も同様にして実施するに至った。「開いた」学Y活動にしたいと感じたのは2012年の学Y活動において、教会やワイズメンズクラブ等、他団体との交流があったからだ。聖書研究にしても都市Y活動の助成にしても、自己の満足だけで終わらない活動が魅力的だと感じていた。そこに加えて、汝羊寮での学Y活動を全く新しいものにするという思いも抱いていた。前期学Y活動に設定したテーマが『囚われと解放』であることも同じ流れにある。

しかし。東北被災地支援活動を始めようとした原点は、このような汝羊寮における学Y活動の変革から生まれたものではない。それは菅井徹人の個人的経験が色濃く関係している。菅井自身は2011年、仙台で浪人生活を送っていた。浪人を決意する前、2011年3月の間と晴れて大学進学が決定した後、2012年3月の間は復興支援団体に参加していた。2011年3月の支援活動においては震災の傷跡が生々しく記憶に残っており、2012年に参加させてもらった東北教区被災者支援センター・エマオでの経験は私の心から仙台の笹屋敷に住む人々のことを常日頃から思い起こすほど、貴重な経験となっている。その思いは札幌にいても忘れることなく、逆に距離が遠のいた程に強く意識するようになっていた。

海を越えた先にある仙台。寮生を巻き込んで全員で活動に赴くことは時間的経済的に容易くないことは明らかであった。だからこそ今回の企画に北海教区がご協力して下さったことには深い感謝を抱いている。現実的な課題を乗り越えることはできたが、大切なことを忘れたくなかった。何故私たちは活動するのか。ボランティアと呼ばれ、簡単に尊敬の対象になりうる活動とは一体何なのか。このような問いかけは活動を共にする寮生全員に迫る。一人ひとりがモヤモヤした思いを吐きながら共有する時が、現地で活動できない時にこそ、それぞれの生き方について一度立ち止まらせ

てくれるかもしれない。

社会人に加え、遠方の学生が集まる時期は総じて連休だ。我々も5月GWに仙台の東北教区被災者支援センター・エマオへ向かった。荒浜と呼ばれる海岸線の近くで農業を営む世帯があり、津波でゴミが混じった土を畑の土に戻す。時間のかかる仕事だ。いつも様々な年齢層が集まっているワーカー達は皆、エマオの掲げる『スローワーク』という精神に基づき、丁寧に仕事へ向かう。エマオの『スローワーク』では、復興するペースを支援者ではなく復興する人々自身のペースに合わせていくことを大事にしている。だからこそ地元の方々とのコミュニケーションも大切にしている。5月仙台は風が少し冷たく時折曇ってはいたが、太陽の日差しは強く、畑を持っている方とのコーヒータイムは貴重で嬉しい休憩時間であった。当時の話を親しげに話す様子が、悲しくも勇ましく思えた。また偶然にも、活動拠点の笹屋敷(ささやしき)でエマオと共同開催のお祭りがあった。前日準備と当日運営に携わりながら、強く感じたことがある。私たち学生と大差ない年齢のスタッフ数名と笹屋敷の町長さんとの連携が素晴らしく、祭りに集う全ての人が楽しんでいたように思う。祭りの踊りを見ながら、また祭りに集まってきた地元の方と会話を弾ませながら、私自身笹屋敷に迎えられた心地がした。被災地というレッテルを貼られた東北の海沿いは、私たちに「開かれていた」。

活動を終え、私たちは何ができたのか振り返ってみれば、声を大きくして言える事は何もしていない。本当に微力な私たちである。無力ではないことを信じ、何度でも笹屋敷に向かいたい。そう思いたくなるようになった。これらの思いを参加者5名の寮生と共有し、寮全体に還元し、汝羊寮以外の団体に伝えていった。また2013年8月時点で約5000人のワーカーがエマオに参加していた。今後とも多くのワーカーが集い、送り出して下さるエマオを、そして活動の場である笹屋敷に住む人や石巻の人のことを忘れず、祈りを送りたいと思って止まない。

## ■第41回全国学生YMCA夏期ゼミナール(2013/9/13~16)

テーマ:「ソウゾウしい社会~情報化社会を生きる~」

会場:日本YMCA同盟 国際青少年センター東山荘(静岡県御殿場市)

主催:公益財団法人日本YMCA同盟

参加者:総勢98名(学生69名、シニア14名、シニア家族3名、スタッフ他12名)

汝羊寮参加者7名(うち1人は実行委員長を務めた。)

講師:鈴木謙介氏(関西学院大学社会学部准教授)

村瀬義史氏(関西学院大学総合政策学部宗教主事)

株式会社インプロジャパン(ワークショップ講師)

### 【寮生感想】

#### 夏期ゼミ活動報告

工学部2年(当時1年) 渡辺光

2013年度夏期ゼミのテーマは「ソウゾウしい世界 ~情報化社会を生きる~」であり、SNSへの依存をはじめとする情報化社会の問題や、情報化社会における人間関係について考えた。

夏期ゼミ初参加であった私は最初、「多くの人の考えに触れることによって自分の考えを深めたい」という期待を持つと同時に、「うまく議論に参加できるのだろうか」という大きな不安を持っていた。しかし、その不安は、夏期ゼミが始まってすぐに吹き飛んだ。同じグループの方々が一学年の私でも議論

に参加しやすい雰囲気を作ってくれたのだ。おかげでとても有意義な時間を過ごすことができたと思う。この報告書では、グループでの話し合いの状況や、最終日の発表の様子、またそこから私が感じたことをお伝えしたい。

私たちの議論は、私たちをとりまく社会や、私たち自身はどのような現状にあるのかを考えることから始まった。私たちの周りには、SNSで友人・知人とコミュニケーションをとろうとする反面、直接的なコミュニケーションが希薄になってしまっているという現状があるということは全員が思っていることであった。その他にも、「インターネット上とリアルとで性格が変わることがある(これは必ずしも悪いこととは言えないが)」、「SNS上で無責任な発言がされることがある」などという意見も出された。また、私たちのグループの全員が何らかのSNSを使っており、中には、SNSに多くの時間を費やしている人もいた。

そのような現状を確認した後は、なぜ社会はそのような状況がみられるようになってしまったのか考えた。「SNSを利用することにより直接的なコミュニケーションが希薄になる」ことに関しては、「SNSが直接的なコミュニケーションからの逃げのツールとして使われてしまっている」「SNSという便利なツールが現れたことにより、便利さだけに目がいきってしまい、直接的なコミュニケーションの大切さをあまり考えなくなってしまったのではないか」などといったことが挙げられ、「無責任な発言がされる」ということに関しては、「読んでいる側も一人ひとりの人間であるという点では直接のコミュニケーションの場合と同じであるという意識が薄れている」などといったことが挙げられた。

それらを踏まえて、最後には、私たちは情報化社会とどのように向かい合うべきかを考えた。「自分がSNSに依存していると感じたときは、少しSNSから離れてみる」「SNSはあくまで、コミュニケーションをより良くするための補助的なツールにすぎないということを理解すべき」などといったことが挙げられた。

最終日の発表は、私たちが3日間続けた議論の集大成であった。私たちのグループは紙芝居による発表であり、「SNSに依存し、直接的なコミュニケーションが希薄になっていた少年が、災害によりSNS上で友人と連絡がつかなくなってしまったことがきっかけに、その友人と直接会うことを決意し、直接的なコミュニケーションの大切さに気付く」というストーリーで、私たちが重要だと思ったことを他のグループの方々に伝えることができたと思う。私はこの紙芝居の絵を担当していたこともあり、発表がうまくいったときには大きな達成感があった。また、他のグループの発表では、劇などのいろいろな形式があり、面白かったし、多くの考えに触れることができたため、とてもためになったと思っている。

夏期ゼミでは、このように多くの人の考えに触れることができたうえに、寮とは違った雰囲気の中で議論ができるという面白さがあり、他大学の方と知り合えるという良さもあった。それ故、私は次回も参加したい。

## 『軸意識』

農学部 3年(当時 2年)

菅井徹人

先に私が書きたい事柄をご紹介します。それは『軸』です。藪から棒に単語を綴る私は、現在北海道大学YMCAの汝羊寮2年目であり、2013年は夏期ゼミナールの企画や運営をとりまとめる、実行委員長を務めさせてもらいました。しかし、そんな私が学生YMCAの全国的なプログラムを終えてから約3ヵ月たった今日も、このような単語で活動報告していることには理由があるのです。

9月に開催される夏期ゼミナールに向け、全国の大学YMCAから選ばれた複数名の実行委員によってゼミナールの核となるテーマを巡る委員会が今年も4月頃から始まりました。3月に開かれた初めての委員会でテーマを「ソウゾウしい世界～情報化社会を生きる～」と決め、さらに8月まで委員全員が様々な視点から企画内容を検討しました。下の文章は、実行委員長の役割として私が推敲・校正・編集でまとめあげたテーマ解題文の一部です。

(中略) 利便性とは裏腹に、現在は社会速度の増加や溢れる情報に対応出来ない人が不適応に追い込まれうつ病、未就労者、自殺などの社会問題が生まれている。効率化が社会の新しいバリアを生み出し、人と人が分断される現実を前にしているからこそ、今『人間関係』に目を向けないわけにはいかない。

様々な問題意識や興味を持った学生が主体となって全体のテーマを考え、それに沿った企画内容を検討するのです。同じような経験を大学の講義でも感じているように思っていました。教室に集まる学生が何人かで一つのグループとなって各学生が意見を出し合い、最終的にグループ全体の意見として全体に向けて発表します。ほとんどの意見には理路整然とした一つの「軸」があります。用意された議題には正解が対応していて、それを頼りに論理構造をくみ上げるからです。そして、これは大概の学生にとって難しいものではないでしょう。人数が多ければ多いほど、正解を導くことは容易くなるからです。

しかし学Yの場で一つの「軸」を保ちながら、自分の論理構造を展開することは非常に難しかった。そこで私は、創り上げていた一つの「軸」を片手間に、自らを疑う気持ちから不安に苛まれていました。不安な状況を打破しようと「軸」創りに躍起になりました。結果、別の「軸」から問題意識を一度も向けていない世界が見えたのです。そこには、思わず頷いてしまうような論理が幾つかありました。納得していくうちに「軸」を複数意識しはじめ、遂に自分の論理構造を展開することが非常に難しくなりました。答えのない問いを考え続ける学生YMCAで、それでも人に思いを伝えるとき、『軸意識』がとても重要なものだと気づかされました。

テーマ解題を聞いてもらった参加者からの感想は様々でした。『軸意識』を怠ったのか、あるいは『軸』を解題文や解題中の紹介に固定できなかったのか。白黒分けられない疑問が、今でも私の説明を理解しがたいものにしていきます。何とも表現し難いモヤモヤした思いは、しかし、大学の学びでは得られない糧であることに間違いありません。答えのない問いに向き合いつづけて初めて、感じられる貴重な感覚だと思っています。そんな学びができる学Yの集大成である夏期ゼミも、私にとってかけがえのない経験となりました。

## ■NSCF (2013/9/21~23)

---

会場 : 東北大学 YMCA 溪水寮、仙台北教会月見岬ジレットハウス

主催 : 北海道・東北地区 学生 YMCA

ホスト : 東北大学 YMCA 溪水寮

講師 : 経堂緑岡教会牧師 松本 敏之 氏

参加者 : 20 名 (溪水寮 13 名、汝羊寮 4 名、九州大学名島寮 1 名、  
熊本大学花陵会 1 名、日本 YMCA 同盟スタッフ 1 名)

### 【行程】

21 日 被災地見学、ジレットハウスにてバーベキュー

22 日 蒼天礼拝、芋煮会、活動報告

23 日 聖書研究会

### 【寮生感想】

#### 初めての NS

文学部 3 年(当時 2 年) 小海 祈

去年参加できなかったため、僕にとっては今年が初めての NS となったが、東北大 YMCA 溪水寮は 2 回目の訪問であった。1 回目は今年のゴールデンウィーク。前期学 Y 企画で東北ボランティアに行った際に寄ったのが初めての訪問だった。今回の NS でも被災地を訪れる機会があり、東北の震災当時の記や現在の状況を溪水寮の川上侑さんなどから聞くことができた。自分たちと同年代の人が震災を目の当たりにしてどう変化があったかという話を聞くことは、震災を改めて身近なものとして深く考えるよい機会である気がする。

思えば溪水寮も小規模の寮を運営しており、寮母さんがいる。寮生が男女混住であるという点などに違いはあるが汝羊寮に近い形態をしており、そういう意味でも今回、身近なものを感じる瞬間が多くあった。今寮がどういうことで悩んでいるのか、そういった話にまで踏み込み、おのおのの相談を聞けるのはお互いがお互いをよく理解できているからだろう。汝羊寮に一番近い学 Y 寮は溪水寮だ。その距離は、実測距離では非常に離れているのだが、毎年 NS、また最近では夏期ゼミなどの交流する機会に特に親しくしている。いつも隣に、自分たちと同じように頑張っている学 Y 寮がある、と信頼を置くことができる。遠くても隣人はいる、聖書の極端にさえ思えるたとえば汝羊寮溪水寮の間柄を考えるとどこか身近に感じるものである。

## 2. 地区

### ■3.11 揚がれ！希望の凧 in 北海道 (2013/3/10)

---

会場 : 手稲前田森林公園

主催 : ワイズメンズクラブ国際協会 札幌クラブおよび札幌北クラブ

北海道 YMCA、札幌凧の会

参加者 : 12 名 (札幌凧の会 6 名、汝羊寮 4 名、札幌ワイズ 1 名、YMCA スタッフ 1 名)

### ■北海道 YMCA 創立記念日集会 (2013/4/7)

---

会場 : 札幌市教育文化会館

主催 : 北海道 YMCA

講師 : JOCS 日本キリスト教海外医療協力会 大江 浩 氏

テーマ : みんなで生きる～人々の命に向き合って～

参加者 : 汝羊寮より 8 名、その他 YMCA 関係者

### ■第 18 回 北海道 YMCA チャリティラン (2013/5/12)

---

会場 : 真駒内公園ジョギングコース

主催 : 北海道 YMCA

参加者 : 約 300 名 (汝羊寮より 8 名)

### ■世界 YMCA/YWCA 合同祈禱週－札幌地区特別集会 (2013/11/15)

---

会場 : 北海道 YMCA

テーマ : 「神の求める『変革』となる」

主催 : 北海道 YMCA

奨励 : 東栄福音本キリスト教会 牧師 遠藤 稔 氏

参加者 : 汝羊寮より 6 名、その他 北海道 YMCA、札幌 YWCA の方々

## 3. 寮内

### ■聖書研究会

---

①2013/5/17②6/14③6/28④2014/1/10

講師 : 日本基督教団手稲はこぶね教会・札幌富岡伝道所 牧師 原 和人 氏

⑤2014/1/24

講師 : 日本基督教団東札幌教会 牧師 黒田 靖 氏

【寮生感想】

聖書研究会について

農学部 4 年

増子翔一

前期学 Y では、原和人牧師をお招きして聖書研究をした。旧約聖書のバビロン捕囚の場面を、前期のテーマ「囚われと開放」になぞって解説していただいた。またそれらの知識だけに留まらず、現代で実際に起こっている諸問題について、聖書からの視点を持つての考察を寮生自身で行った。

自分は自身の大学生活と、バビロン捕囚でのユダヤ人とを比較してみた。バビロン捕囚ではユダヤの民が囚われ、また自分の国に戻る姿が描かれている。しかし解放されたユダヤ人はどのように国として統一していいのかわからず、結局二度目の捕囚、さらにペルシアの支配に屈することになる。自分も大学生になり、親のもとを離れ自由に自分のしたいようにできると思っていた。しかし実際それができているかと言われれば疑問であり、いわゆるモラトリアムに浸っている状態である。これはバビロンとい

う囚われから解放されたユダヤの民と、自分も同じ轍を踏んでいると気付かされた。目標を定め、自分らしく生きることの難しさと大切さを改めて考えた、今回の聖書研究会であった。

## ■発題

### 【寮生感想】

#### 「囚われと我われ」

農学部 3年(当時2年) 松

井一晃

前期の学Y活動では、第3イザヤの聖書箇所より「囚われと解放」というテーマを設け、聖書研究会や寮生からの発題を通して、「囚われ」という問題を現実の問題へと演繹的にとらえていこうとした。具体的には、以下のような発題がおこなわれた。

発題者	タイトル	内容
増子	エゼキエル書を読む	汝羊寮の文字にもある羊という言葉に着目し聖書での羊と羊飼いの立ち位置を考えた。
菅井	問題との関わり方	東北被災地に赴く前に、寮生同士でボランティアをおこなう意義について考えた。
室谷	歴史問題から考える戦後日本	戦後日本が共有した歴史観のイメージと戦後日本としてのあり方を考えた。
森	マイナンバーとプライバシー	近年可決されたマイナンバー法に関連して、プライバシーについて寮生の考えを聞いた。
梅木	イザヤ書から考える人生の選択	聖書研究の内容を振り返り、人生の重大な決断で何を大切にするのかを考えた。
平井	Discovery Nonchannel ～技術者倫理～	スペースシャトル政策の実態を学び、技術者の気持ちを技術者倫理の観点から考えた。
松井	囚われと我われ	日頃の大学生活を送る上での「囚われ」を探り、それに対しどのように臨むのかを考えた。
小海	パレスチナの歴史	パレスチナの歴史を学び、聖書物語と歴史的価値観から解放の意味を考えた。
渡辺	SNSによる囚われ	近年急激に利用が増えるSNSに囚われる現代の自分達の生き方を考えた。
宇津城	エヴァンゲリオンQはなぜ不評か	ヒット作であるアニメーションの評価から、新しい活動に踏み出す意義を考えた。

発題については、「囚われと解放」というテーマに関わるかどうかは強制しなかったものの、結局は全員がこのテーマに関わる発題をした。まじめだ。しかしこれこそテーマへの囚われともいえる。このまじめさは日本人の性によるものであるのだろうか？

以上のうち、僕が発題した「囚われと我われ」について振り返ってみる。この発題では、日々の生活で囚われていることを振り返ってみて、今後どのように生きていこうかということについて考えた。議論を深めていく中で、「もし囚われから全く解放されて自由のみとなったならば、どのようになるのだろうか？」という話題が登場した。ここで、全く囚われのない自由な状態を想像してみると、我われはど



のように行動してよいのかわからなくなってしまうのではないかと考えられた。そのように考えていくと、ある程度の囚われは、我われの生活を円滑にしてくれるといえるだろう。端的に言えば、囚われた方がラクなのである。上で発題が全てテーマに関わったという話をしたが、それはまじめゆえというよりもむしろ、寮生がラクをした結果といえよう。

一方で、何かに囚われることで、不必要な苦しみを味わうことになっている場合も少なからずある。そのような場合、我われは自分が囚われているという状況を認識していないことが多い。結果的に囚われるかどうかはさておき、自分の状況を客観視して、ベストな方向へ進んでいく努力は必要である。今期の発題に当てはめて考えてみると、テーマに関わらずに発題したほうが自分のやりたいことができた可能性があったというようなことがあり得る。

以上のように、今期の発題を通して、自分の囚われを認識してうまく付き合っていくことが大事であるというような感想を抱いた。

## ■OB 交流会 (2013/7/21)

---

講師：日本港湾協会名誉会長 栢原 英郎 氏 (1960 年入寮)

参加者：汝羊寮

### 【寮生感想】

#### 栢原さんのお話 汝羊寮での学びと人生

理学院修士 2 年(当時修士 1 年) 海木寛之

今年度の前期学 Y では汝羊寮 OB である栢原<sup>かやはら</sup>さんによる講演会が行われた。寮で OB の講演会が行われるのは恐らく初めてではないだろうか。栢原さんは 1960 年に汝羊寮に入寮し、3 年間在寮した。その後のご経歴は北大 HP で見つけたものを引用する。

昭和 39 年に北海道大学工学部を卒業し運輸省に入り、平成 10 年に退官。前半はその大半を他省庁組織で過ごし、三つの全国総合開発計画の総点検や選定作業、海外での技術協力など、本流から外れたところで、友人に同情されながら、しかし本人は適性を発見して大いに活躍。最後は自分でも驚きながら技官のトップである港湾局長と技術総括技官をつとめた。外れ者が経験した多様な公共政策の現場を伝えたいと願っている。

北海道大学創成機構 環境・技術政策 (平成 19 年度で終了) より

栢原さんには汝羊寮で経験したことが、自らの人生の中でどのように生かすことができたかを話して頂いた。輝かしい成功を取めた栢原さんに、人生の先輩としてだけでなく、汝羊寮の先輩としてお話をして頂き、その話しを糧に寮生が今後寮生活をより良いものとするのが目的である。栢原さんが汝羊寮生活で得てその後の人生で非常に役に立った能力は、他人のいろいろな意見に興味を持ち、それらを柔軟に自分の中に取り入れることができる能力であったそうだ。栢原さん<sup>栢原さん</sup>在寮時の汝羊寮では、冬になると寮生が薪ストーブを囲みながら、毎晩のように議論を行っていた。議論に参加する学生にはいろいろな学部、いろいろな学年の学生がおり、議論の題材は森羅万象にわたっていたという。栢原さんは議

論をすることが面白かったこともあり、毎晩のように議論に参加していた。その場で取り上げられる題材の中にはあまりなじみのないものも多くあったが栢原さんは自分に予備知識がない場合でも、議論に参加するために、相手の意見を理解しようと努めていたという。また議論をリードする先輩もみんなが議論に参加できるよう気を配る雰囲気があったため、みんな議論に参加することができた。このような議論を毎晩続けるうちに、自分とは違う意見にも興味を持ち、柔軟に取り入れる能力が自然と身につけていったという。卒寮後、栢原さんが国家一種に合格し公務員となる。公務員は約2年毎に各地の仕事場を転々とする。従って、その都度、違う土地で違う人間と直面した仕事にいかにか柔軟に対応していくか求められた。その状況に対応していく時に役に立ったのがまさに、汝羊寮のまきストーブの周りで培った能力であったという。

私は栢原さんのお話を聞いて、他人の意見を柔軟に取り入れる能力は、普通の大学教育を受けるだけでは中々身に付かないのではないかと感じた。私は現在、化学系の研究室に所属している。周りには化学の教育課程を受けてきた学生ばかりである。彼らは研究に対する考察は深く気付かされることが多い。しかし知識が専門分野に偏っており、視野が狭いと感じる時がある。化学の議論は盛り上がるのだが、汝羊寮の学 Y で行われるような、自分の内面を表現する議論はほとんどできない人が多い。また、議論をしたとしても、他人の考えを理解しようと努める人は少ない。学生が集まり森羅万象について語りあう汝羊寮の文化はそのまま受け継がれ、現在の学 Y に見て取ることができる。私は栢原さん講演を聞き、当時の汝羊寮と現在の汝羊寮の共通性を見つけることができ、現在の学 Y で行われている様々な題材に対して議論し合うという経験が、自分にとって大きなプラスとなっていることに改めて気付くことができ、とてもうれしく思った。